

# 大久野通信 vol.31

春到来



朝晩はまだ防寒着が必要ですが、活動拠点はようやく桜の季節となりました。4月半ばからはタケノコやワラビが顔を出し、6月には梅が実を付けます。一方、畑では夏野菜に向けた植付が始まっています。中東情勢による石油不足や物価高による生活苦など暗いニュースばかりの昨今ですが、里山は恵みの季節を目前にして活気づこうとしています。

## INDEX

- ・竹炭の農業デビュー
- ・脱石油依存の提案
- ・今後の展望

## 竹炭の農業デビュー

3月末の日曜日、北総クルベジ喜屋武会長と東邦大学安立准教授が活動拠点にお越しいただきました。活動拠点の環境に触れて頂き、地元で親交を深めている仲間も集まって盛り上がりました。今後も引き続き交流していけたらと願っています。里山整備の一環で作った竹炭を喜屋武会長に約300kg購入いただき、初めて明確な対価が生まれたこともニュースです。北総クルベジさんは、竹炭を畑に撒いてCO2を長期間固定しながら作物を作る農業を実践されていますので、我々の竹炭がこの分野にデビューするというわけです。農業に関する貴重な情報もたくさん教えて頂き、ど素人集団の大久野倶楽部メンバーには非常に刺激的な1日となりました。残りの竹炭は、約100kgを滋賀県立大学のメタン抑制フィールド実証に活用することになっています。このほかに、農地の防草用途、カリ肥料としての用途、バイオ炭コンクリートの実証などに引続き活路を見出そう考えています。



竹炭製造の様子



北総クルベジ会長とシンクス廣田氏

## 脱石油依存社会の提案

渋谷が村だった時代に、日の出は既に町だったとか。石油製品の台頭や輸入材の流入で、特産だった杉や竹の需要減少と共に活気を失ってしまったというのが日の出町の近代史の様です。ここにきて中東情勢の悪化で、エネルギー資源に乏しい日本は経済が大打撃を受け、更に円安が追い打ちを掛けています。1970年代の中東戦争、1980年代のイランイラク戦争、1990年代の湾岸戦争、そしてアメリカによるイラン攻撃と石油に依存した生活は一定の間隔で脅かされることを繰り返しています。そろそろ石油への過度の依存を省みる必要があるのではないのでしょうか。石油依存が始まる以前の生活がどんなものだったのか、プラスチック製品で木材や竹材に代替可能なものがないかを考えてみる。そして石油への依存を減らすことが、有事の経済不安や心的ストレスを減らし、穏やかで人間らしい暮らしに繋がる。何が言いたいのか、日の出町が再び脚光を浴びる様になればと考える訳です。



植林後放置され大きく育った杉



整備後の竹林に生えるタケノコ

## 今後の展望

西多摩郡日の出町大久野は、車を利用すれば十数分にスーパーが数件あり、30分弱走ればイオンモールが2箇所あります。高速のインターもこの圏内にあるので、都心や他県への移動にも便利です。駅も車で数分、健脚なら徒歩も不可能ではありません。そんな地理的条件を備えながら、住民の高齢化が進み、空き家や耕作放棄地が増えています。鹿やイノシシ、更には熊まで登場します。里山暮らしの入門者にはまさに穴場的な地域です。里山には、その気になれば年間を通じてやる事が沢山あり、のめり込むと没頭できるので飽きることがない、成果がついて回ることで達成感を感じやすい、といった魅力があります。ただ、生活の糧を得る手段が得難いので街に出て働くことになり、その結果利便性から移住が進んでしまう。こうした悩みを抱える場所は、日本全国に沢山あるのではないのでしょうか。里山が生み出す「もの」や「こと」が新たな価値を生み、生活の糧が得られれば過疎化が防げると考えています。そんな「もの」や「こと」を提案できれば、そんな思いで大久野倶楽部は活動を続けます。